アジア農科系大学間における遠隔教育の試み

前　多　敬一郎

Ⅰ．はじめに

国際標準の教育，あるいは教育の国際化ということに異を唱える人は少ない。学生の視野を広げ，国際水準の学生を育てることは大学教育の大事な側面の一つである。また日本全体にとっても重要なことで，教育の国際化は常に重要な国策の一つである。数ある大学ランキングを見ても，日本の大学教育の課題が国際化であることに疑いはない。しかし，これが各論ということになると話は別である。国境を越えて通用する教育のシステムを作るという「崇高な」目標をもって，そのまま日々の大学教育の現場にあてはめようとすることはたいへんな作業である。

ここでは生命農学研究科が取り組んでいる国を越えた遠隔教育の試みについて簡単に紹介したい。現場の生の声として，読み流していただければ幸いである。

Ⅱ．アジア地域における国際教育協力の重要性

日本は食糧や生物資源・材料の多くを海外，特にアジアからの輸入に依存しており，アジア地域の食糧・農業・環境は，わが国の国民生活と相互に影響しあい極めて密接な関係にある。したがって，農学や環境科学系の大学院教育においては，国内にとどまらず，アジア各国・各地域の自然，社会，経済などの地域特性やフィールドを基盤にした国際的視野での教育が極めて重要である。平たくいえば，アジアの自然や社会，その特性を熟知し，その上で特定の分野に秀でた人間を育てることによって，真の意味でアジア各国との国際協力が成り立つのであり，日本の食料の安全保障に結びつくということである。

東南アジア地域の農学系大学院教育においては，ASEAN の一機関である東南アジア文部大臣機構（SEMEO），その下部機関である農学教育研究地域センター（SEARCA）によって，ASEAN 加盟国大学の学生が地域内の各国はもとより，欧米の協力大学も含め，密接な交流が行われている。また，このような交流のなかで他の大学院での教育を受ける国際的な遠隔教育システムが構築されてきた。このような遠隔教育をさらに推進するツールとして e-learning の利用がクローズアップされてきたが，本格的な利用は立ち後れており，アジアにおいては，日本をはじめとする先進国の大学がリーダーシップをとって，course management system（CMS）等を用いた遠隔教育を確立する必要がある。

Ⅲ．アジア農科系大学連合（AAACU）について

AAACU は設立 30 年を超えるアジア地域内の農学系の大学コンソーシアムである。25 カ国か

ら48の大学及び高等教育機関が参加し，これまで学生の交流を軸に活動を行ってきた。しかしながら，メンバー校には途上国の大学も多く，財政的な制限から学生の交流は非常に限られたものであった。このネットワークを有効に活用しようというのが，われわれが最初にたてた戦略である。高等教育機関における人材育成は，いうまでもなく途上国支援の柱でもあり，本コンソーシアムを実質化するためには，各国に散らばる教員などの人的資源を有効に活用していくことが急務であった。この状況を打開するための方法として，永年遠隔教育が考えられてはいたが，実現はしなかった。インターネットとCMSの発達により，比較的安価に遠隔教育が可能になり，途上国も参加できるような状況になった。本コンソーシアムとしてもいくつかのメンバー校間で共通のコースを立ち上げることが2003年12月3日の名古屋大学におけるAAACU理事会で話し合われた。

名古屋大学大学院生命農学研究科は，アジア農科系大学連合（AAACU）において中心的な役割を担ってきた。実はこれまでに，２回の隔年会議（総会）を名古屋で開催しており，また当研究科の研究科長や教員が，AAACUの会長，副会長，理事，評議員などの主な役員を歴任してきたこともあり，幅広い人脈がある。また，ここ数年間，当研究科と名古屋大学農学国際教育協力研究センター（ICCAE）が共同で，アジア地域における国際的な農学教育のための人材及び教育プログラムに関するデータベースを作成している。このデータベースを用いることにより，あとのe-learningコースの選定が非常に安易となると考えている。

Ⅳ．e-Learning ？

実は大学間の遠隔教育を考え始めたとき，CMSなどという概念はわれわれの頭の中にはなかった。衛星中継などと今から考えれば化石みたいな話も出ていた。しかしとある講演会でお聞きした梶田先生のお話が私の頭の中には妙に引っかかっていて，すぐに連絡を取った。詳しい話は省略するが，当然のことながら，WebCT CEを使ったe-learningに話は決まった。実は梶田先生には農学部でe-learningやCMSのことについて最初に講演をお願いしたわけであるが，このときも私を含めて何人の人がその概念や革命的な教育やその周辺の事務的作業の改良について理解したかは定かではないが，そのときからいまだに格闘が続いている。

Ⅴ．一に講習，二に講習，三四がなくて五に講習

e-learningということばを聞いて多くの教員がどのように感じるだろうか？そんなものが普及すれば教員なんて必要なくなるのではないか？画面を通して生の生きた学問なんて伝えられるはずがない。だいたいにおいだってないし，臨場感の重要な農学という学問分野にフィットするわけがない。いろんな意見があると思う。当然だ。教育って肌と肌のふれあいでしょう！？こういう疑問を払拭するにはともかくふれてもらうしかない。とにかく講習に次ぐ講習で理解してもらうしかない。

名古屋大学教員及びAAACUのメンバー校教員を対象として，３回のトレーニングコースを実施した。ワークショップも開催して，とにかく参加する教員の意識を高めようとした。しかし，

AAACU という大きな集まりのなかでコースを作っていくことはたいへんな作業である。何カ国かが集まって協議するだけでもたいへんな議論になる。文化も大学の成り立ちも教員の役割もずいぶん違う。2005 年度には，もっと集中的に資源の投入を行うため，いくつかの大学を選定した。このため，タイのカセサート大学及びチェンマイ大学，台湾の台中大学を訪問して，計画の概要について説明を行った。これまでは伝わらなかった熱意も，実際に会えば伝わったのか，この 3 大学が今では本気になってコースの立ち上げに努力している。

当初は WebCT Campus Edition を使ってはじめた活動も，一年後には梶田先生のご厚意で WebCT VISTA を CMS として，10 のパイロットコースを選定し直して，再出発した。ひとつには，大学を超えたコンソーシアムにおける使用料が想像を絶するほど高価で，とても手に負えなかったからである。このライセンス料については，特に国際的な遠隔教育を目指す場合に一番の障害になると考えている。また，WebCT が Blackboard に買収されたらしい，このニュースを伺ったときに，われわれの計画はどうなるのだろうと思った。しかし，ここも梶田先生に頼るしかない。現在は SAKAI に移行すべく考えはじめてはいるが，教育の手段を営利企業にゆだねていることの危うさをひしひしと感じている。話は違うが，学術雑誌も然り。営利企業が学術情報の流通を握っている例は他にもありそうである。

Ⅵ．カリキュラムの違いをどう克服するか？

われわれの目指すところは，単位互換制度あるいは共同学位プログラムである。講習やワークショップでは，参加者の目は e-learning という手段にばかり行きがちである。しかし実は一番むずかしいのは，カリキュラムの摺り合わせである。単位の定義から始まり，各科目の中身やレベルなど大学によってさまざまなカリキュラムをどう摺り合わせるか？

本計画の当初から，ICCAE の客員教授ポストを使い，アジアの教授を招へいして，AAACU と協力しつつ，AAACU メンバー校における大学院カリキュラムの徹底調査を行ってきている。さらにこの調査をもとに大学院カリキュラムのデータベースをも立ち上げつつある。ほんとにむずかしいのは，このデータベースをもとにカリキュラムの比較検討をしていくところであるが，この壁もこえなければいけない。e-learning システムの確立とカリキュラム研究は，遠隔教育システム構築の車の両輪である。この二つがそろってはじめて，単位互換制度や共同学位プログラムを念頭においた遠隔教育が可能になる。

データベースができたところで，各大学に共通のプログラムを立ち上げるところがまたたいへんである。いくつかの大学で数回この話題について話し合ったが，総論賛成，各論反対，議論百出である。文化の違い，といってしまえばそれまでだが，異文化を理解することが唯一の方法であろう。

Ⅶ．本計画の実際

本計画では，まず最初に大学院修士課程を標的として，英語の on-line 教育コースを開発しようとした。これらのコースは同時に名古屋大学の日本人学生に対する英語の修士課程プログラム

となる。冒頭に述べたように，日本人大学院学生に国際感覚を身につけさせることが大きな目標のひとつである。それとともに，同じ教育プログラムがアジアの大学間での共通の修士課程プログラムとして公表され，各大学の大学院学生の教材として，各大学の教員が利用できるようにする。

修士課程をターゲットとした理由は２つ，一つは学部の科目と違い，各大学に特色ある科目が存在することである。基礎的な科目については各大学が必ず教えており，各大学にとってメリットとはならないであろうと思われるからである。例えば基礎的な科目を学んだ名古屋大学の生命農学研究科の学生にとって，熱帯の生物に関する講義を受けることはたいへん興味深いと考えられる。第２の理由は，教員にとってつくりやすいと考えたからである。修士課程では自分の専門に近い分野の講義をするので，コースを作る側にとっては，よりモチベーションが高まると考えられる。

具体的には，名古屋大学大学院生命農学研究科の修士プログラムの一部を英語化，on-line 化し，教材に用いるか，あるいはカセサート大学及びチェンマイ大学，台湾の台中大学から e-learning プログラムの開発に関わる教員を募り，それら教員が開講している修士課程のコースを on-line 化することの両方を考え，講習とワークショップを繰り返している。

現在までのところ，10 のパイロットコースのうち，３つのコースが完成しているが，まだ道のりは遠いといわざるを得ない。積極的な教員をどうやってリクルートしてくるか，日本でも外国でも悩みは同じである。

Ⅷ. おわりに

この試みを始めたのは数年前であるが，さまざまな人たちのご協力を得て，進み始めている。しかし，大学を超えたコースを創っていくことは，想像以上のむずかしい作業であり，一朝一夕にできるものではないということを身に沁みて感じ始めていることもまた事実である。まだどのように進行していくか，まったく未知数の計画について述べることは時期尚早だったかもしれないが，われわれの目標に対し，読者の方々の共感を得られれば幸いである。

（まえだ　けいいちろう：名古屋大学大学院生命農学研究科生命技術科学専攻）